

[選挙に臨む姿勢]

立候補する理由・函館市をどう運営していくか基本的な考え方

私は、昨年12月に函館市の助役を辞任し、その後、いろいろな経過の中で、友人や市民有志の皆さんに支えられ、今回の市長選挙に立候補することになりましたが、

3つの点について、市民の皆さんの審判を仰ぎ、信を問いたいと考えています。

- ・ 一つは、私の助役辞任の理由となったものですが、政治倫理や公務員倫理の問題であり、
- ・ 二つ目は、水族館など、いわゆる「箱物行政」の考え方、
- ・ 三つ目は、函館のまちの現状についての認識と、どのようなまちづくりを進めていくのか、ということについてです。

まず、政治倫理や公務員倫理の問題ですが、

- ・ 函館市は、年間、約2500億円の資金が動く巨大組織であり、市民の税をお預かりして、入札や許認可・人事など、たくさんの権限を行使しているわけですから、市長や助役・幹部職員は、公平・公正な立場で市政の執行に当たらなければなりません。

社会正義を踏まえて、毅然として、しっかりしなければなりません、実際には利権を巡っていることが起きます。

- ・ 具体的には、昨年春、福祉施設の許可を巡って、利権目当ての地元情報誌から、私や福祉部が、脅迫的に不法行為を迫られるという場面があり、これを断ったところ、インターネットや雑誌で、たいへんな誹謗中傷がなされ続けてきました。
- ・ 問題は、この雑誌社と行政・議会・経済界のトップの関係でありまして、この人達が雑誌社と親しい・親密な関係であったとしたら、一体、どうなるでしょうか？

議会での議論は、この間の報道で皆さんご承知のとおりであります、会場にお集まりの皆さんに、自分の会社を例にして、想像してほしいと思います。

社員が正しいことをして、お客さんにいわれのない誹謗中傷をされ続けている。一方では、社長はその攻撃の当事者と仲の良い関係であって、叩かれるのは君達個人の問題で、僕には関係ないと、うそづいていたら、会社は成り立たないでしょう。

部下を守らないトップのもとでは、誰も真面目に働かなくなってしまうのではないのでしょうか。

- ・ ましてや、市役所は、市民の税をもって運営されている組織です。

こうした市政の権力の状態を正さなければ、職員も市役所も、正常に機能しなくなってしまいます。

今の市政は、密室の中で、一部特定の人によって淀んでしまっているといわざるを得ませんし、全国でも稀に見る異常な状態であります。

こんな状態で良いのかどうか、私は、市政を正すために市民の審判を仰ぎたいとするものです。

2つ目は、箱物行政についての考え方です。

- ・ 市長は、昨年秋、市民の心配の声や反対意見を受けて、水族館の建設を凍結したわけですが、今年に入ってからは、3選後には、再び建設に向けて取り組むという後援会のパンフレットを配布し、また、2月議会でも、そのように答弁し、来る選挙に向けて活動されてきました。

- ・ しかし、私は、2月24日に立候補を表明するに当たって、マニフェストを作成し、「水族館はつくらない」との公約を発表しました。
- ・ それを受けて、選挙の争点としないためかどうか分かりませんが、市長も水族館は断念するというものでありまして、政治家としていかがかと思いますが、今度は、総額で150億円でしょうか、唐突に、市民会館や体育館を新築するという公約を掲げられました。
- ・ 深い検討がなされてのことかどうか、思い付きの政策に思われてなりません、はなはだ疑問ですし、なぜ、そんなに箱物にこだわるのか、私には、理解できません。
市民会館は、この間、7億円近くの資金をかけて、大ホールなどを改修済みですし、体育館も、昨年1億3千万をかけてアリーナの天井などを改修したばかりです。
これを壊すということですから、大変な政策の変更です。
自分の家を自分のお金でいじるなら、こんなに簡単に決めてやるのでしょうか？
- ・ 財源が厳しい中でも、これから建設していかなければならない建物は、水産海洋都市構想を進めるためのドック跡地での研究棟や、南茅部の国宝・中空土偶などのための縄文文化交流センターなど、まだまだたくさんあります。
- ・ 今、函館市の借金は、おおよそ2,800億円、一人当たり100万円近くの借金があります。
人口が急激に減少していく中で(返済の割り勘要員が減っていくのですから)、いったい誰がこれを返していくのでしょうか？
後世につけを残さないために、私達は、真剣に考えなければいけません。
- ・ 今あるものは、メンテナンスにキッチンとお金をかけて(このほうが市内の中小業者も助かります。)大事に使っていく、大学などの教育・研究を伸ばしたり、産業や福祉政策などで本当に必要な施設は、十分検討して、資金を投入していくという地道な発想が必要です。

三点目は、これからのまちづくりについてです。

- ・ 函館市の最大の課題は、加速度的に減少している人口の問題です。
人口が都市のすべての基本になります。
- ・ 今年の人口減少は、約3,500人。この内訳を分析すると、
1,000人が少子化による自然減で、出生数が2,000人しかない時代に突入しています。
2,500人が、雇用を求めて、札幌や東京・東海・愛知などに流れている現状です。
- ・ 後戻りのない、大変な人口減少の時代に突入している、地域がスカスカになって、コミュニティや産業が崩壊していくかも知れないという危機の時代にあるということを、市民の皆さんにきちんと、情報公開し、みんなが共通認識を持って、知恵と力をあわせていく必要があります。

そのうえで、どのような取り組みをしていくかです。

- ・ 人口の著しい減少と地方の衰退の時代、残念ながら、函館のまちは閉塞感に満ちています。
いつの時代でも、突破口を開き、困難を乗り越えていくのは、若い人達の力であって、
地域の再生と未来は、幕末・明治の殖産興業のように、すべて、人と技術の力を高めることから始まると考えます。
今、元気の良い地方＝東海や愛知を見ても、すべてそうです。
必ずしも、自動車産業など大企業ばかりでない、地場の中小・零細企業であっても、人材と高い技術力を誇っている企業があって初めて、地域が元気であるわけです。

- ・ そのためには、いたずらに箱物をつくるよりも、まず、子育てや教育・人づくりに力を入れて、地域の産業基盤を強いものにしていくことで、若い人達が安心して、子ども達を生み・育て、夢と希望を持って暮らしていける地域社会づくりに全力を挙げなければなりません。
- ・ **したがって、私の4年間の市政の基本テーマは、「子育て・教育・人づくり」です。**
- ・ 子育てを支援したり、学校や地域の教育力を高めたり、産業界・市民団体の人づくりのために、行政として、積極的に資金を投入していく考えでいます。
子どもや若者たちを育て、函館らしい文化や産業をはぐくんでいくことで、何よりも「市民の元気」と「まちの元気」を取り戻していきたいと考えます。

そうした志をもって、4年後の目標も掲げました。

元気を取り戻して、出生率や出生数を1割あげよう、就業の機会や正規雇用者数も1割あげよう、市民所得も1割あげよう、
この目標を合言葉に、みんなで取り組んでいきたいと思いますと提案するものです。

市長は、その運動の、旗振り役を果たす人間です。

雲の上の偉い人ではなく、常に現場に入って、自分の目で見・耳で聞いて、みんなと話し合い、みんなの能力を引き出せるよう働く人間、みんなと気持ちを一つにして、一緒に汗を流せる人間でありたいというのが、私の考えです。

もちろん、情報は共有化しなければ、共同の意識・連帯の意識は生まれてきません。

すべてが透けて見えるガラス箱のような市役所にして、市民と気持ちを一緒にして働いていける市政を実現する考えであります。皆様のご支援をお願いします。

1. 人口減少対策と少子化対策について

人口減少は、少子化と雇用を求めての人材の流出によるもので、地域にとって重大な問題でありますから、その解決策に全力を尽くします。

それには、やはり「子育て・教育・人づくり」、そして、魅力ある安定した雇用の創出です。

子育て支援や教育の充実では、

- ・保育料の大幅軽減や、第3子以降の子どもさんの中学校までの各種費用の無料化
- ・小・中学生までの医療費を近隣自治体に合わせて無料化していくこと、
- ・学童保育所への施設の手当てや指導者の育成
- ・子供会や少年団など子ども育成活動への支援
- ・校長先生の「知恵の予算(100万円程度)」の確保
- ・子どもなんでも相談110番の設置などを、実施していく考えです。

また、子育てに関することは、教育・福祉部・保健所など多数部局にわたりますから、

連携して総合的に進めるため、子育て推進室を設置し、4年間市長が直接担当して進めます。

そして、産業基盤の確立と雇用の安定や雇用環境の改善に全力をあげていくことが必要ですが、人材育成や労働政策では、

- ・地域の各分野を支える「人づくり・知恵の予算」の確保や
- ・労働・雇用問題を専門的に進めるため、労働政策室の設置などを行っていきます。

2. 高齢者対策・医療について

これから、我々団塊の世代が高齢者の仲間入りをすると、ますます高齢者の数が増大し、地域社会でのウエイトも大きくなってきます。

ですから、高齢者が健康であること、生きがいをもって元気に社会参加できていること、安心の保健・医療・福祉が整っていること、そのための施策が大切です。

マニフェストに、「子ども達の笑顔は、お祖父ちゃん・お祖母ちゃんの笑顔から」と書いて、一番目の施策に掲げましたが、まず健康づくりが一番。「ぴんぴんころり」と言いますが、死ぬ直前まで元気が一番です。

きめ細かな健康づくり運動を拡充するため、健康推進室を設置して、総合保健センターが中心となって、教育委員会や学校、医療機関・介護福祉施設などが連携して、各種の事業を推進します。

その上で、お年寄りの方の社会参加や生涯学習の場の充実といったことや、一方で、介護・福祉を支える人材の育成なども進めていきます。

医療については、国の医療制度の改革や医師不足などから、公立病院・民間病院を問わず、厳しい経営環境に置かれていますが、

函病の経営健全化をはじめ、医療機関相互の連携組織を設置して、総合病院や専門病院の連携と、地域の高度医療の確立を目指したいと考えています。

3. 経済活性化に何を重視するか

経済は、短期的経済政策と中・長期的経済政策に分けて取り組みます。

- ・短期的には、中小企業対策や融資制度、市場や商店街の振興といった、日々、企業を取り巻く環境の中で起きてくることに対して、市として親身になって相談に乗り、支援できることは何でも、スピードをもって対応していきます。

中・長期的には、地域経済を支える産業基盤となれるプロジェクトを進める必要があります。

函館市の場合、

- ・大学などのキャンパス都市、国際的な水産・海洋の教育・研究と関連産業の拠点都市、
- ・観光・コンベンションの都市、国際交流や貿易の都市、
- ・合併によって日本一となった「沿岸漁業のまち」、
- ・さらには、福祉リゾート都市として定住者を誘致していくことなど、

様々な産業集積の優位性と可能性がりますから、こうしたことを殖産興業の気持ちを持って、大胆に伸ばしていきたいと考えます。

これには、若い人達も含めて、民間からの人材や知恵を集めて、取り組みます。

さらに、既存の経済部局を、産業政策部と観光・コンベンション部に再編することで、体制の強化も図っていく考えです。

4. 新幹線時代に向けた街づくりについて

ハード面では、新函館駅と現函館駅の利便性の高いアクセスの確保や、新外環状道路など幹線道路網の整備などの課題がありますが、これは関係機関の努力で進捗している状況ですから、やはりソフト面の対応が課題です。

これまでの東京と函館という点のつながりから、関東以北の都市が、高速鉄道の線のつながりになってくる、しかも大量輸送で、ということの意義を効果的に生かしていくべきですし、青函の交流や連携も飛躍的に伸びる可能性があります。

新幹線の開業をビジネスチャンスの到来として前向きにとらえて、函館の魅力づくりや、関東以北の各都市との、観光・経済・文化・教育など、様々な分野の交流を意識的に拡大していけるよう、関係団体と連携して、私自身も外に出て、積極的に取り組んでいきたいと考えます。

新幹線開業は8年後。8年という期間はすぐそこですから、具体の行動を早めに起こしていきたいですね。

5. コンベンション施設について

大会・コンベンションが大事ということは、皆の一致した考えですが、どういった規模のどのような内容のコンベンションの誘致を目指すのかとなると、まだ考え方が定まっていないのが現状です。

井上市長の公約は、最低でも、2,000人以上のもので施設整備とのことですが、

- ・その規模のコンベンションが、全国でどの程度あるのか、頻繁に誘致が可能なのか、
- ・函館が他都市と比べて、優位性や競争力があるのかどうか、
- ・さらに、市民が日常利用する体育館との兼用となれば、利便性のあるものとなりえるのか、などきちんとマーケット・リサーチをしたうえでないと、危険です。

昨年、函館では、全道・全国大会など、100近くのコンベンションが開催されていますが、むしろ、200人とか、多くて500人とかいうものが多いのが実態です。

大きな大会は、現在の市民会館や体育館でも実施しているわけですから、

今、施設整備をするとすれば、小規模のものを数多く呼ぶという考え方も成り立つと考えます。

その際、500が良いのか、1000近くまでなのかなど、規模については議論が必要ですが、都市景観地域の緑の島に、函館の身の丈に合ったグレードと利便性の高い施設を整備し、誘致や開催のお世話をする受け入れ体制などのソフトを整えれば、これは競争力があるのではというのが、私の考えです。

ホテルなども含めて、その規模の大会がたくさん集まる・集まりやすいまちとして特徴付けて、アピールしていくのも、都市の優位性を高めるひとつの方法と考えます。

6. 財政健全化の見通しと、その手法

市の中期財政試算では、毎年、40億円程度の財源不足となっており、これを行財政対策の効果と行財政対策債・退職手当債などの市債で当面しのいで、平成21年度頃までに収支均衡を目指したいとしているものですが、

市税や地方交付税の伸び率などの前提条件が変われば変動するものですし、さらに、人口減少の要素がどう影響してくるか、この試算には入っていませんので、毎年、見直しをしながら、きちんと財政の進行管理をしていくことが必要です。

財政健全化に向けての手法となれば、民間への業務委託などで人件費の削減に努めることはもちろんですが、一方では、地域経済の活性化を図り、市民所得の増などで市税の増大を図っていくという上向きの社会政策の視点も持って、行財政運営をしていく考えです。

いずれにしても、市の財政状況は、国の動向や景気動向など、不確定要素が多い面がありますので、その時点・時点で、市民の皆さんに情報を公開しながら、進めることが大事と考えます。

7. 市役所の将来像について

市役所は、市民みんなの税金で運営されている「おおやけ」のための機関ですから、市民の頼れるサービスの拠点、市民の様々な活動を支える事務局、地域の未来を切り開く先導隊でありたいと考えます。

そのためには、まず肩ひじの張らない、市民から親しまれ・信頼される存在でありたいと思います。市長も、雲の上の偉い人のような人でなく、誰でも気軽に声をかけられる人でありたい、市役所も、ガラス箱のように、中がすべて透けて見えるものでありたい、若い職員も、自由闊達に議論し合って、市民のために伸び伸びと仕事をして、育てている、市役所の将来像となれば、これが、私の理想形です。

それと、日本は明治以来、終身雇用の官僚制度が基本ですが、これは世界的に見れば特異です。世界の大半の国では、役所と民間の職員が、行ったり・来たり、交流しているのが、実態で、このほうが、お互いの気持ちや事情もよく理解出来るし、創造的であり得るのではと感じています。ですから、私が市長になった場合には、若い職員を育てるために民間や他の機関に出したり、民間からも、専門家などを責任者として迎えたりということ、積極的にやってみて、いわば、これまでの日本の役所のあり方を少しガラガラボンして、役所のあるべき改革の方向を、函館から発信してみたいという気持ちがあります。

8. 政治倫理問題について

政治倫理問題については、冒頭で申しあげたので、もう、あえて述べることはありませんが、正しいことをしている部下や仲間を守ることが、政治倫理以前に、組織としても・指導者としても、すべての基本です。

せっかくの機会ですから、指導者のあり方として、函館出身で、今はもう亡くなりましたが、田中角栄さんの秘書をされた早坂茂三さんの言葉を紹介させていただきます。

文芸春秋の「諸君」という雑誌に載った、「越後に三人の男がいる」という文章ですが、長岡藩を近代化し北越戦争で倒れた河井継之助、南太平洋に散った山本五十六、そして、田中角栄をあげています。

その中で、山本五十六について、

- ・部下が戦闘に出ている時、夜を徹して、畳に正座して帰りを待っていたこと、
- ・戦闘機が航空母艦から落ちそうになったとき、飛び出して、体をはって止めたこと、
- ・部下が手柄をたてた時、賞賛して、まず、みんなに功績を讃え・紹介したこと、などを挙げて、「功績は部下のもの、責任は自分のもの」という山本五十六の信条を伝えてくれています。

そして、「自らに厳しく、他人に寛大な名将で特筆されるのは、人望である」と結んでいます。

今は昔の物語で、私達には、とてもまねの出来ることではありませんが、組織や指導者のあり方を皆で考えるために、函館ゆかりの方で、函館も大変お世話になった先輩である・早坂茂三さんの言葉を紹介させていただきました。

[中間まとめ]

前段に、市長に立候補するに当たっての考え方や、少子化対策・高齢者対策・医療・経済の活性化・新幹線への対応などについて、お話をさせていただきましたが、

地方自治の目的は、住民福祉の向上と地域の振興発展という、二つとされています。

私のマニフェストでは、これを「子ども達の笑顔のために」という言葉と、「地域の未来のために」そして、そのことを進めるための「市民の自治を拡げます」という言葉でまとめています。

私の政策のテーマは、「子育て・教育・人づくり」ですが、困った時は人が頼りです。

困難な時代ですから、まず人材を育てて、人と技術の力を高めていくことが、地域の再生と未来につながるという気持ちで、みんなが力を合わせて取り組んでいきましょうと申しあげたいと思います。

そのうえで、函館は素晴らしい資源に恵まれたまちです。

- ・国際海峡を有して、「ほくとう日本」と言われる北海道・東北の中心にありますし、
- ・開港都市という諸外国との関係での歴史性もあります、
- ・多様な産業や商業・貿易・教育・学術研究の集積もあります、
- ・さらに、陸・海・空の交通体系も揃っていて、まもなく新幹線も来ます、

志を持って、こうした資源を生かしていけば、地球時代が到来しているわけですから、函館が極東アジアの都市づくりのモデルともなれるまちに発展していけるのではないのでしょうか？

北大が中心となって取り組んでいる国際水産海洋都市構想で、地元企業も連携して新しい研究開発や商品開発が始まり、他地域から研究者や企業も集まっています。

新しいかたちの人材と企業の誘致ということになります。

未来大も、企業などからいただく年間の研究開発費が、1億円を突破するまでになりました。

これらは、キャンパス都市を形成するという政策の一例ですが、観光や水産、国際貿易、ありとあらゆる分野にわたって、みんなの力で可能性を広げていきたいと考えますし、

私に、その旗振り役をさせていただきたいと願っています。

また、公共交通施策を推進するための、乗り放題の「エコロジーパスポート・環境定期券」の発売や、合併市町村への地区制度の創設など、全国の自治体で、気持ちはあるが、まだ実現できていない施策にも、もともとの函館はハイカラなまちですから、挑戦してみたいと考えています。

[発言者総括]

相手立候補予定者との違いをアピール＝討論の最後に

私は、公約のトップに、市長のあり方や市役所のあり方を書きましたが、とにかく、風通しのよい、スピード感を持って市民のための仕事に取り組む、そして、何よりも飾らない市役所をつくりたいと考えています。

2月24日に市長選への立候補を発表し、この間、民間団体や企業など、たくさんの方から励ましの言葉をいただいたり、ご意見を伺ったりして、歩いてまいりました。

その中では、市に頼んでもなかなか動いてくれないといったことや言下に冷たく拒絶されたこと、市民の方のいらだちもあったりして、当然のことかも知れませんが、市役所の内で見ていることと、市役所の外から市役所を見ている物事の見え方は、全く違うということを実感させられました。

市長の耳から担当者の耳までの縦のラインが遠すぎるな、と思いましたし、組織をもっとシンプルでフランクなものに改革していかなければと考えています。

また、経済情勢は厳しいものがあります。職人さんを抱えた建設業の方、商店主の方、働いている方、求職中の学生さん、たくさんの方の生活実感も厳しいものがあります。

いろいろな方からのご意見はメモにつけて、実現できるものは、すぐにでも実現していくつもりですが、どのような立場にあっても、この間に学ばせていただいた市民の目線と生活の実感は、忘れることのないように、私の原点として取り組んでいきたいと考えております。

よろしく願いいたします。ありがとうございました。